

供述調書作成用覚書

住居 山梨県富士吉田市兼倉2丁目7-1

(電話 0555-2XXXX)

職業 僧

(電話 070-2XXXX)

氏名 瀬田 浄真 (せた じょうしん)

1978年 2月 14日生 (31歳)



上記の者は2010年 1月 9日午前11時 48分、増長寺寺務所において、
本職に対し、任意次のとおり供述した。

高尾：午前11時48分、これからあらためてお話を伺わせていただきます。

瀬田：よろしくお願いします。

高尾：まず確認させてください。あなたは今朝、いつもは5時ぴったりに起床するはずの住職が起きてこないで、気になって彼の部屋へ行くと、血まみれで倒れている住職を見つけた。あなたの叫び声で丸尾武彦さんが本堂のほうから駆けつけたので、彼に事情を説明した後、部屋を見張っているよう頼み、この寺務所の電話から警察に通報した。通報時刻は午前5時5分。間違いないですか？

瀬田：間違いない……と思います。110番したときに、正確な時刻を確認したわけではないですけど。

高尾：住職の遺体が発見された現場の状況について、いくつかお訊ねします。部屋の中からあなたの指紋が検出されているのですが、これらは？

瀬田：襖についていたもの以外は、今朝のものではないと思います。毎日、所用で住職の部屋を訪ねるときもありましたし、掃除もしていたので。

高尾：部屋の床に写真が1枚落ちていたのですが、遺体が発見されたとき、ご覧になりましたか？

瀬田：見た気がします。取り乱していたので、はっきりとは憶えていませんが。

高尾：写真にさわりましたか？

瀬田：部屋にあるものには、何もさわっていません。血まみれで倒れている住職が、息をしていないとわかったとき、ただ叫び声を上げることしかできませんでした。

高尾：なるほど。その写真なのですが、ちょっとご覧になっていただいてもよろしいでしょうか（写真の現物を確認してもらう）。これなのですが、見たことはありますか？

瀬田：さあ……ないと思います。

高尾：ベンチに座っている子供に見覚えは？

瀬田：それも、ないです。すみません。

高尾：わかりました。ありがとうございます。ところで、現場の文机の上には、住職の日記や、動物の絵本がありましたね。

瀬田：日記に関しては、夜の護摩行のあと、部屋で線香を焚きながら書くのが住職の日課でした。絵本のほうは、ちょっと私にはわかりません。

高尾：では、昨夜のことをお訊ねします。午後8時半から10時半くらいのあいだ、浄真さん、どこで何をされていましたか？

瀬田：夕食後、まず庫裏で明日の朝食の下準備などをすませました。そのあと「鈴を聴く会」をはじめるとまでは、この寺務所で書類仕事をして……「鈴を聴く会」が終わると、皆さんに湯たんぽを配ったり、また寺務所に戻って書類仕事をつづけたりしていました。そのうち郷里の母にちょっとした用事があったのを思い出したので、電話をかけて……久々の電話で、母がよく喋ったものですから、受話器を置いたときには10時半を過ぎていたのではないかと思います。

(母親との通話時刻は通信業者に確認済→21:49～22:40)

高尾：夜10時頃、遠くから動物の唸り声のようなものが聞こえたという話があるんですが。

瀬田：ちょうど電話をしていた頃なので、特に記憶にはないです。

高尾：昨夜、最後に住職の姿を見たのはいつですか？

瀬田：「鈴を聴く会」の直後です。住職が護摩行に向かうため部屋を出てきたときに行き合いました。挨拶だけで、とくに会話は交わしていませんが。

高尾：そのとき、部屋の中は見えましたか？

瀬田：見えましたが、べつに、いつも通りだったように思います。

高尾：日記や絵本や写真はどうでした？

瀬田：そのときは、なかったんじゃないかと。

高尾：これは内密に願いたいのですが、この鈴に見覚えはありますか？（鈴の現物を確認してもらう）

瀬田：さあ……寺のものではないとは思いますが。

高尾：参加者の誰かが身につけていたとか、そういったご記憶は？

瀬田：ごめんなさい、憶えがないです。寺で鈴といえば、コンゴウレイなので。

高尾：すみません、もう一度よろしいですか？

瀬田：コンゴウレイです、こういう字で（デスクのメモ帳に「金剛鈴」と記す）。ゆうべの「鈴を聴く会」は、私が参加者の皆さんに、この金剛鈴の音を聞かせるという集まりで、去年の「真呼吸の会」第1回でも行いました。音色が煩惱を払ってくれると言われていて、1日目の最後に参加者たちといっしょにその音を聞くことにしているんです。互いの顔が見えないほどの暗闇で、金剛鈴の音を聞いたあと、私が拙い法話をさせていただくという流れです。もし金剛鈴にご興味があれば、本堂にあるので、取ってきませんか？

高尾：参考までに、はい。

（瀬田浄真氏が金剛鈴の現物を本職に見せる）

高尾：そういえば「鈴を聴く会」の最後に、浄真さんが「因業不滅」という言葉に言及されたと聞きました。もともと「因業消滅」という仏教用語を、生前の住職がそう言い換えていたとか。住職は、何か、消えない罪のようなものをお持ちだったんでしょうか？

瀬田：私にはわかりかねます。

高尾：よく口にされていたんですか？

瀬田：いえ、何年か前に、たった一度だけです。でもすぐに……いまの言葉は忘れてくれ……お前は「因業消滅」を信じて修行をつづけてくれと……そうおっしゃいました。ご自分で口にされたのさえ、そのときが初めてだったようで、ひどく戸惑っておられて……何といひますか、個人的に、心の中に仕舞っていた言葉だったのだと思います。

高尾：心の中の言葉ですか。なるほど。では最後に「真呼吸の会」というものについてお訊きしますが、この宿泊イベントの参加者は、住職が選んでいたんですか？

瀬田：いえ、私です。住職は、どんな人でも受け入れたいということで、去年の第1回は参加希望のハガキの中からご自分でランダムに選んでいたのですが、老人ばかりになってしまったんです。それでは逆に不公平かもしれないということで、今回から私が選定を任されました。どんな人を選んだのかは敢えて教えないでくれと言われていたので、そのとおりにして……ですから住職は、誰が来るかはご存じなく、皆さんが寺に到着するのをとても楽しみにしていらっしゃいました。

高尾：参加者を選ぶとき、浄真さんはどのような判断で選定を？

瀬田：男女比や、お仕事や年齢や立場のバラエティーをなるべく考慮したつもりです。

高尾：たしかにバラエティーに富んでいますね。

瀬田：はい。警備員の方が、じつは元刑事だったり、無職のお若い女性が、とても裕福な家のご令嬢だったり、意外なこともありましたし。バーで働いているという宗谷さんも、見かけによらず力持ちで、寺の掃除で倉庫を片付けたときは、ずいぶん助けられました。

高尾：人は外見で判断できないものですな。

瀬田：外見ですべてわかれば、刑事さんのお仕事も楽なのでしょうけど。

高尾：同感です。……では、いまのところは以上で結構です。ありがとうございました。後ほどまた伺いすることが出てくるかもしれないので、できれば寺を離れないようお願いします。

前同日 山梨県 富士吉田 警察署

司法警察員 警部補 高尾克也 (高尾)